

あすを拓く



「見る工芸から使う工芸へ」という
 商工省工芸指導所から受け継ぐ理念
 幾重にも新しいものづくりに挑んできた
 「玉虫塗」の歴史が、
 深い漆の輝きの中に透けて見える

有限会社 東北工芸製作所
 常務取締役・店長

佐浦 みどりさん

プロフィール
 1969年、岩手県盛岡市生まれ。1991年東北学院大学法学部を卒業し、1998年に東北工芸製作所入社。2005年、店長、2013年より常務取締役兼店長に就任。現在に至る



「玉虫塗」は、昭和60(1985)年に宮城県産の伝統的工芸品の指定を受けた漆器。銀粉を撒き、その上から染料を加えた透明な漆を塗り上げるという独特の技法を採用。光の加減で色合いが微妙に変わる豊富な色調がタムシの羽根に似ていることから、この名が付けられている

界に挑戦してきた歴史だった。

海外の照明に合う漆器づくり 新しい世界に通用する伝統工芸の曙

「東北工芸製作所に入社した当時は、工芸についてまったくの素人でした。先代の社長に工芸のこと、玉虫塗の歴史のこと、いろいろ聞かされました」

玉虫塗の歴史は昭和7(1932)年仙台に設置された国立工芸指導所から始まる。顧問にはドイツの建築家ブルーノ・タウト。世界的デザイナーの剣持勇らを輩出するなど、日本の工芸デザイナーの基盤を作った場所で海外に「輸出」することを念頭に開発された。「ツヤのない漆器は日本の照明の下では映えませんが、間接照明の海外の生活スタイルには映えないのです。その発色をどうするかが大きな課題でした」この壁を打開したのが、工程の見直しだった。伝統的な下地を施した器に銀粉やアルミニウムを蒔き、その上から染料を加えた透明な漆を吹き付け、加飾(模様付け)して仕上げるという新しい技法。この何層にも重なる工程の多さがつややかな輝きをもつ玉虫塗の命となった。

この新しい玉虫塗の技法を、仙台を代表する工芸品に育てたのが、東北工芸製作所の初代社長佐浦元次郎だった。「進駐軍の米兵たちが行き来する仙台で、キャンドル立てやコーヒーカップ、ナイフ、フォーク付きの皿などを製作し販売しまし

玉虫塗総本舗 東北工芸製作所

商工省工芸指導所と東北帝国大学金属材料研究所とが協力して 昭和8年に仙台市に創設した。昭和14年に玉虫塗の特許の使用権を取得して以来、仙台を代表する工芸品として玉虫塗の生産を行っている

所在地
 仙台市青葉区上杉 3-3-20
 ユナイト上杉ビル 1F
 Tel 022-222-5401
 Fax 022-222-5462
<http://www.t-kogei.co.jp/>



- 1 現代的なデザインで話題を集めた新しい玉虫塗ブランド「TOUCH CLASSIC」
- 2 「戦国BASARA」など、話題のアニメとコラボレーションした絵葉書を発表している
- 3 創業時の東北工芸製作所の写真。玉虫塗の伝統を切り拓いてきた場所
- 4 進駐軍に人気のあった玉虫塗。モダンで艶やかさが話題となった

た。モダンで艶やかさが話題になり、たくさんの方が店に訪れたと聞きます」

「断らない」という信念が後押しをしてくれる人に出会わせてくれた

時代の変化に柔軟に反応しながら、人々の求める漆器の形を探ってきた玉虫塗。強みは木地だけでなく、ガラスやプラスチック、紙など、さまざまな素材に塗れること。その強みを生かし、ボールペンやワインスタンドなど、これまで多くのコラボレーション商品を開発してきた。そして近年話題になったのは、人気アニメ「戦国BASARA」とコラボした絵葉書。「これまで、アニメのファンの方が玉虫塗を買うということはなかったのでは。客層がきつと対極にありますからね。アニメとのコラボは、玉虫塗の客層を大きく広げてくれたと思います」

佐浦さんのモットーは「断らないこと」。新しい話や提案を、断らず、諦めず、逃げずにチャレンジしてきたことが、新しいものづくりの世界を切り拓いてきたのかも知れない。

しかし、新しい取り組みが順調に進み始めた時、東日本大震災が発生した。

震災を超えて地元宮城の誇りに 工芸指導所時代の理念を胸に

「震災後、売り上げの中心だった記念品

の発注キャンセルが相次ぎました。さすがにもうだめかもね、と話してました」
 そんな苦難の中で知り合い現在では工房で働くスタッフを通じて、東京のクリエイティブチームとのコラボが実現。「TOUCH CLASSIC」というブランドづくりが始まった。皆、工芸指導所のもので、新しい理念を受け継いでいる東北工芸製作所の姿勢に共感してのことだった。「話し合ったのは、現代のライフスタイルに合った素材を使い、商品展開も日常的に使えるものに限定しようということ。工芸指導所時代のコンセプトそのものでした」
 「TOUCH CLASSIC」の成功をベースに、様々な展開が生まれている。産学官連携の先駆者として、在野の展開のみならず、研究機関との共同研究、仙台市との連携、東北大学との商品企画など、地域とともに新たな商品や産業を作り出していきたいと考えている。地元宮城の代表的な工芸品になっている玉虫塗。ソチ五輪フィギュアスケート男子金メダリスト羽生結弦選手の凱旋パレードの際には、宮城県の村井嘉浩知事から県民栄誉賞の記念品として玉虫塗の大皿が贈られた。
 「地元の素材や技術、人をキーワードに新たな連携を続け、玉虫塗の歴史が続いていくようにしたいですね。若い人たちにも、地元にも素晴らしいものづくりの伝統があることを知ってもらって、ぜひ仙台・宮城を盛り上げて欲しいなと思います」